

勅撰三集における「閨怨詩」の特徴について

胡 思 鳴

前論ですでに、「宮体詩」、「宮怨詩」、「閨怨詩」の分類及び定義を明らかにした。しかし、各類の詩には内容から分類される他、共通点もあるはずだ。また、詩の特徴を見出すことで、いっそう正確に詩を把握できるだろう。以下、特徴的な語句や内容に注目して検討していく。

一、季節

「宮体詩」、「宮怨詩」や「閨怨詩」における一番の共通点は季節である。それらが描くのはほぼ春あるいは秋である。例外として「王昭君」に関する詩の多くは冬である。次に挙げるのは「春」を示す言葉である。例えば「春女」、「春園」、「春日」、「春閨」、「春苑」、「春草」、「春情」、「春夜」、「春風」、「春簫」などである。これらの言葉は直接季節を示した。また、「秋」の付く言葉には「秋雲」、「秋蓮」、「晩秋」、「秋日」、「秋風」、「秋鴈」、「秋氣」、「秋暮」、「秋林」などがある。だが、ここで特に「王昭君」に関わる詩の季節を注目すると、「雪」、「氷」、「霜」により冬であることが明らかにになる。ただ、朝野鹿取の「奉和王昭君。一首」(『文華秀麗集』一八一頁)には「雪」と「秋早寒」が同時に出現しており、どの

季節を描いているのか判然としない。詩の全体を読まなければならないのである。

王昭君は遠く匈奴の域に嫁ぎに行く。それゆえに、羅衣を湿らせる涙が乾くことはないが、やはり匈奴に行かなければならない。途中雪に逢って、晝眉が壊れ、裁髪が風に損なわれる。辺塞の樹木は春になっても葉が無く、胡(匈奴の別称)の空は雲が流れて秋空になり、寒さが早まる。彼女は閼氏(匈奴の后)になることを願わなかったのである。それは匈奴の元に嫁げば幸せにはならないからである。詩の全体を見ると、この詩は胡地の冬、春、秋の厳しい環境を描いており、季節を特定していない。

それに、この一首の「王昭君」と同じように、他の「王昭君」の詩も、恋と関係なく、王昭君の史実を借りて離別・辛い胡地の生活・故郷を思う哀愁を語っている。

では、嵯峨天皇の「王昭君。一首」(『文華秀麗集』一八〇頁)と良岑安世の「奉和王昭君。一首」(『文華秀麗集』一八〇頁)を読んでみよう。20番詩は嵯峨天皇の作である。「王昭君は若くして漢宮を去り、憂いを抱きながら胡地に入った。この地は千万里の遠い天の果てにあつて、一たび都を去ってしまったば還ることもない。砂漠は、蟬の羽のように薄く美しい王昭君の髪をいため、風

や霜はその美しい顔をきずつける。ただ漢の都長安に照る月だけがあつて、幾重にもかさなりあつたこの地の山々を照らして漢宮を去る彼女を送るばかりなのである。」一方、良岑安世は以下のように詠む。「えびすのいる土地はなんと遙かで遠いことか、国境の山を越え行くのに耐えられない。自分の心は漢の朝廷に帰っているが、身体はえびすの国に向かうのである。うらめしい心は辺地を吹く風を追って起こり、憂いは北方のとりでに通ずる路が長いことによつて長くいつまでも続く。どうかひとり飛ぶ雁となつて、毎年一度は南の故郷の方に飛びかけたいものだ。」良岑安世の詩にははつきり季節を示す言葉がないが、「辺風」と「鴈」から秋と推測できるだろう。この二首は自然環境が極めて悪い胡地に嫁いだ王昭君の故郷への思いを描かれていると同時に、詩人の王昭君に対しての同情もはつきり読み取れる。

菅原清公の「奉和王昭君。一首」(『文華秀麗集』一八〇頁)は故郷への思いではなく、王昭君の国家への影響及び離別の哀傷を詠じた。季節は「胡氷」から冬と分かる。24番詩は離別と旅の哀愁を表したものである。季節は「霜」と「雪」から冬だと定めることができる。

従つて、朝野鹿取の「奉和王昭君。一首」(『文華秀麗集』一八一頁)を除いて、他の閨怨詩・宮怨詩などは季節がはつきりとわかるのである。つまり、「閨怨詩」、「宮怨詩」及び「宮体詩」に描かれる季節は春と秋であり、「王昭君」に関わる詩はほぼ冬である。

しかし、なぜこれらの詩に現れた季節は春と秋が多いのであろうか。筆者は以前、32番詩「神泉苑九日落葉篇應製」には学者を集めて『淮南子』を作った淮南王劉安を言及した。周知のように、『淮南子』は「老荘の説を中心に周末以来の儒教・兵家・法家

などの思想をとりいれ、治乱興亡・逸事・瑣談を記載(広辞苑)したものである。嫦娥などの神話もそれにより日本に伝来したので、すなわち、『凌雲集』、『文華秀麗集』並び『経国集』の漢詩人たちはすでに『淮南子』を読んでいたと考えられる。『淮南子』巻中の十二には次のように述べられている。

文者所以接物也。情繫於中、而欲發外者也。以文滅情、則失情、以情滅文、則失交。文情理通、則鳳麟極矣。言至德之懷遠也。(中略)

春女思、秋士悲、而知物化矣。號而哭、嘯而哀、而知聲動矣。

容貌顔色矣、詘伸偃仰知情偽矣。故聖人栗栗乎其内、而至乎至極矣。(以下略) (『淮南子』中 四九九頁)

傍線部は「春に女性は思いにふけり、秋に男性は心悲しむ、それで万事の移ろいが知られる」、言い換えると、女性は春に恋などの思いに耽り易く、男性は秋に悲しみ易いのであるが、それによつて、万事万物の移ろいが知られるということを表している。春と秋になると、自然に感情が溢れるために、その心情が詩にも表れるのである。

二、植物に関する表現

以下に示す引用の傍点部は花などの植物である。例えば、花宴、百花、紅英、蓮、萱草、菊、桃李、柳、落葉、桂などである。頻出率からみると、花と桃李を使つて美人を引き立たせることが多い。藤原是雄の「奉和王昭君。一首」(『文華秀麗集』一八一頁)

の「花簪冒雪残。(簪は雪を冒して残はる)」に見える「花簪」を除き、滋野貞主の「王昭君」「凌雲集」一三四頁、嵯峨の「王昭君。一首」(『文華秀麗集』一八〇頁)、良岑安世の「奉和王昭君。一首」(『文華秀麗集』一八〇頁)、菅原清公の「奉和王昭君。一首、朝野鹿取の「奉和王昭君。一首」(『文華秀麗集』一八一頁)などの「王昭君」の詩は、常に胡地、つまり砂漠などと関わる。それゆえ、王昭君は有名な美人であるのに花と結ばれないのである。

三、月に関する表現

「高樓明月」という表現は二箇所あり、「雜言。奉和聖製春女怨」小野岑守(『凌雲集』一二五頁)と「奉和春閨怨。一首」巨勢識人(『文華秀麗集』一七六頁)である。月を表現する他の言葉には巨勢識人の「和伴姫秋夜閨情。一首」の「楊柳疏窗夜月寒」(楊柳の疏窗夜月寒し)、「奉和婕妤怨。一首」の「空簾曉月明」(空簾曉月明らかなり)、「嵯峨の「王昭君」の「唯餘長安月」(唯餘すは長安の月)」などがある。余(200)は「月」は「遥かなる人をしたう媒介としての意味に用いられ」と述べたが、閨怨詩において長い間会えない夫に対して、閨の女が「空閨對月悵離居」(空閨月に對かひて離居を悵む)、「或いは、桑原腹赤の「同和前韻」(『文華秀麗集』二〇八頁)に見えるように「月落月昇秋欲晚。妾人何耐守閨情」(月落ち月昇りて秋晚れなむとす。妾人何ぞ耐えむ閨を守る情に)」という怨みを吐くことは極めて自然なことだろう。

四、涙に関する表現

「怨詩」という名を聞くと、「泣く女」がすぐ頭に浮かび上がるが、勅撰三集における閨怨詩に登場する泣く女は意外に少ない。具体的に「泣く」表現を挙げてみると、小野岑守の「奉和觀美人蹋歌御製」の「泣眼看看不曾厭」(泣眼看看かつて厭わず)、「雜言。奉和聖製春女怨」小野岑守の「慈母教諭遂相泣」(慈母教諭し遂に相泣き)、「奉和春閨怨。一首」菅原清公の「眼險常啼謾似肥」(眼險常に啼たれ謾に肥えたるに似たり)、「奉和春閨愁。一首」朝鹿取の「妾獨啼」(妾獨り啼く)と「涙如玉箸流無斷」(涙は玉箸の如く流れて断つこと無く)、「奉和春閨怨。一首」巨勢識人の「晝夜吁嗟泣如雪」(晝夜吁嗟きて泣雪如し)、「奉和婕妤怨。一首」巨勢識人の「啼顔拭尚濕」(啼顔拭へど尚し濕り)、「奉和王昭君。一首」菅原清公の「泣隨重塞盡」(泣は重塞に従ひて盡き)、「奉和王昭君。一首」藤原是雄の「羅衣泪不干」(羅衣泪干かず)という八つの表現を確認できる。

五、班婕妤、团扇、長信宮

「班婕妤」、「团扇」、「長信宮」や「昭陽殿」などの言葉を見ると、「宮怨詩」の基本要素がすでに備わっていると判断できる。なぜならば、班婕妤の故事と彼女が作った「团扇歌」による表現が入っているからである。

まず、班婕妤の史料を取り上げたい。『漢書』の「外戚伝」には次のように記されている。

成帝の女御、班婕妤は、成帝が即位してすぐ、選ばれて後宮に入った。最初は小使(女御の位、四百石相当)であつた

が、しばらくの間に帝の寵愛が篤くなり、婕妤（上卿相当）に出世し、増正舎（後宮に八棟ある第三の棟の名）に住んだ。二度出産し、男の子が生まれたが、生まれた後数カ月でなくしている。

成帝が後宮の庭に遊び、婕妤に、自分と一つ輿に乗れ、といったことがある。婕妤は辞退していった。

「昔の絵を見ますと、聖人といわれるほどの君は、すべて名臣がお側についております。三代（夏・殷・周）の末世の君になって、初めて気に入りの女がお側につきます。唯今、一つ輿にと仰せられますが、それに似たようなことになりませぬか？」

帝はこのことばを尤もと思い、一つ輿に乗ることを止めた。皇太后はそれと聞いて、「女の鑑は昔ならば樊姬、今なら班婕妤じゃ」

婕妤は『詩経』や『窃窕』『德象』『女師』などの諸篇を愛誦し、帝のお側に上がるにも、手紙を差し上げるにも、古礼に法って行動した。

鴻高年間（前二十〇十七）以降、成帝は女色にふけるようになった。班婕妤は自分の腰元の李平を献上し、李平は寵愛を受けて、婕妤の位に昇った。帝は、

「昔、衛皇后（武帝の後）も微賤な生まれから出世したものだじゃ」

といい、李平に衛という姓を賜った。これが所謂衛婕妤である。その後、趙飛燕姉妹も、また微賤の生まれから立身した。これが礼制を超えた贅沢をし、だんだん古い人より威勢がよくなった。班婕妤と許皇后は、いずれも帝の寵愛が薄れ、お

召しを受けることも稀になった。

鴻嘉三年（前十八）、趙飛燕は「許皇后と班婕妤は、帝の心をとろかすための祈祷をし、後宮の他の女を呪詛し、帝にまで悪口を吐いている」と誣告した。許皇后はそれがために廃せられた。班婕妤も厳しく責め問われた、婕妤が答えるには、「わらわは、『死生、命あり。富貴、天にあり』と聞いております。正しい道を修めてさへも、なかなか福は授からぬもの。まして悪事を働いて、それで何の福が望めましよう？ もし鬼神に耳があるとしても、不忠な訴えことには耳を貸しますまい。もし鬼神に耳がないとしたら、訴えても、無益なこと。されば、わらわは、さようなことはいたしませぬ」

帝はこの答を至極尤もと思い、班婕妤を哀れに思い、黄金百斤を賜った。

趙飛燕姉妹は驕りたかぶり、嫉妬深い。班婕妤は、いつもでもこうしては身が危うい、と思い、長信宮（太后の宮）で太后のお世話をしたい、と申し出た。帝はその願いを聞き届けた。婕妤は身を退いて、長信宮に住むこととなり、賦を作つて、我が身の運命を悼んだ。

その賦の他には、『玉台新詠』に載せた「怨詩一首」、また「團扇歌」も有名である。

新裂齊紈素，

皎潔如霜雪。

裁爲合歡扇，

團團似明月。

新に齊の紈素を裂けば

皎潔にして霜雪の如し

裁ちて合歡の扇と爲せば

團團として明月に似たり

出入君懷袖、

動搖微風發。

常恐秋節至、

涼風奪炎熱。

棄捐篋笥中、

恩情中道絕。

君が懷袖に出入し

動搖すれば微風發す

常に恐らくは秋節の至りて

涼風炎熱を奪ひ

篋笥の中に棄捐せられ

恩情中道に絶えんことを

『玉台新詠』七八〜七九頁

この詩は班婕妤が長信宮に退いてから、傷ついた時に自ら作ったものである。自分を円扇に喩え、捨てられる可能性に対しての不安や、結局捨てられたことに対しての悲しみ・恨みを巧く描いた。

以上のことから、「团扇」、「長信宮」、「昭陽殿」が班婕妤及び彼女の詩作を指すことがわかった。よって、これらを念頭に置いたうえで、前に載せた「班婕妤」と関わる詩を詳しく読もう。

六、「長門怨」という詩題及び「買得長卿才」

陳皇后は班婕妤と違い、あまり才能がなかったもので、詩の字句にはほぼ直接陳皇后の名が示されない。では、読者は如何にしてその詩が彼女についての詩だと分知れるのか。まず、彼女についての詩だと決めるのは詩題——「長門怨」である。そして、陳皇后の生涯を了解しなくてはいけない。これから、『史記の事典』(2002)に「衛皇后」の記述に載せた陳皇后のことを取り上げる。

武帝がまだ太子であった時、長公主嫫（景帝の姉）の娘（姓

は陳氏）を妃としており、即位すると妃は皇后となった。しかし、陳皇后には子がなかった。武帝が太子になるのには長公主の力によるところが大きかったので、陳皇后はそれをかさにきて傲慢であった。陳皇后は衛子夫が長愛を受けているの聞き、怒りのためしばしば死にかけた。陳皇后は巫祝を呼んでまじないの術を行い、衛子夫を呪った。事が発覚すると、帝は怒って、陳皇后を廃し、衛子夫を皇后とした。

この記述は簡単だが、陳皇后が傲慢で、嫉妬深い人間であることがわかる。それゆえ、陳皇后は廃された後、「長門怨。一首」御製に書くようなことをしたのである。

以下、詩の概要を記す。日暮れの奥深い長門宮（長門宮は長安の東南の郊外にある離宮）のうちに、幾重にもかさなった宮門はしまったまま開かない。秋の風はかぐわしい桂で作った美しい御殿にふいて我が身を驚かせ、あけ方の月は蘭台を照らす。鏡にむかうと美しい容貌が改まって衰えをみせ、琴を奏すると、君の寵愛を失った怨みの曲がしきりに起こる。武帝の寵愛を再び望むことは困難であったので、遂に司馬長卿の文才を黄金で買って再び寵愛を元に戻すことができた。

しかし、それは詩の中だけであって、実際は、その文章を買った陳皇后は一生懸命暗記して武帝の前に詠じたが、武帝はあまり興味を示さず、結局、陳皇后は失敗している。

「閨怨詩」や「宮怨詩」、「宮体詩」が描いたのは、陳皇后と班婕妤のことだけではない。ほかの詩にも夫を思う婦人の物語を語っている。

「奉和春閨愁 一首」（朝鹿取）は自らを女性にして、第一人称

で詩を詠じた。この詩は一人の女性の人生を語っている。

以下、内容を記す。「私は元長安に良い生活していて、美しい顔と華麗な服装を合わせて花のようである。それに、十五歳の時、歌が皇女に負けないぐらい素晴らしく、二十歳になると、踊りが季倫の家に行けるほど上手くなった。ある日、南より使者が来た。私のことを聞いて、春の日に洛陽の嫁として迎えた。洛陽に着いた最初、赤い桃の花と白い李の花が洛陽を奇麗に飾っている。毎日、夫と一緒に贅沢な日々を送った。しかし、私の心の喜びがまだ尽くさない内に、夫が国家のために遠い所へ行き戦わなければならなくなった。「良人」即ち夫は馬に乗って遠く戦いに行った。

私は門を出でて、ただ彼が鞭をあげて去るのを見た。行く道は知れず幾日もかかるほどである。報国の恩義の重さを考えているが、誰が私の春閨の愁怨の情を思うだろう。夫が出かけてから、私は紗窓を閉じ、別れる鶴のように泣き、辺塞の垣に登るように腸がすでに断たれ、楚宮に入るのでもないのに腰が直ちに細くなった。水上の浮萍は根があるだろうか、風前の飛ぶ絮は元より帯がない。私は萍や絮のごとく往来する。秋が去り、春が帰り、年が積む。

私は一人空閨を守りながら泣いている。空しく空閨に座り、掃除をする気分になれず、部屋にはほこりが積んで暗くなり、外の階段も草が茂っていく。庭の池の前に仲良く鴛鴦と屋根の二匹の燕を悵然として見ながら、涙は玉の箸のごとく絶えず流れている。激しく泣くため、髪も抜けてしまった。夫はいつ戦争に勝って帰るだろう。私は一人で落花を見ることに堪えない。落花が散り尽くす時、私の顔も老いるだろう。あなたは早く帰って私の花のようない時々の美しさを見るべきである。夫がいつ帰るかが分らない私は、これから、独り寝の寂しさの中で、ただ夫が早く帰ること

を祈ることしかできない」。

詩の前半は才能と美貌を持つ女が良い夫と結婚したことに始まる。しかし途中、話が一転し、夫が戦争のために出かけてしまう。後ろの部分は詩題に応じて、閨の女の哀愁を語っている。また、詩人は「春」という季節をキーワードにして、物語を作った。この詩の見事なところは「春」で女が洛陽に嫁いで、またこの「春」に夫と別れた。つまり、短い春にこの女性が最大の喜びと別れの悲しみを感じたことを描いたのである。見事な「閨怨詩」と言える。

七、鶯、鴈、鸞、鳳、鶴、鴛、鴦、燕、コオロギなど

前に挙げた詩文には「鶯、鴈、鸞、鳳、鶴、鴛、鴦、燕、コオロギ」などの動物が出てきた。これらの動物は、二種類に分けられる。それは実在するものと実在しないものである。実在するのは鶯、鴈、鶴、鴛、鴦、燕、コオロギ、現実にはないものは鸞、鳳である。

また、これらの動物には季節感が強く感じられる。春の鶯と燕、秋春の雁と鴛、秋の蟬とコオロギである。特に鴈にまつわる表現は詩人に愛用された。やはり、鴈が毎年南北を通る特徴を持ったために、古人にとつて思いを伝えるものとして受け止められたからだろう。鴈の他に詩人に好まれたものは鶴である。中国において「鶴」は別れることと繋がるので、夫と別れる悲しみを表す閨怨詩には鶴が重要であった。例えば、『玉台新詠』巻下・王僧儒の「擣衣」には「鶴」と「雁」が共に描かれている。

「擣衣」 王僧儒

足傷金管遽。

多愴綈光促。

露團池上紫。

風飄庭裏綠。

下機驚西眺。

鳴砧遽東旭。

芳汗似蘭湯。

雕金辟龍燭。

散度廣陵音。

慘寫漁陽曲。

別鶴悲不已。

離鷺斷更續。

尺素在魚腸。

寸心憑雁足。

傷むこと足し金管のにわかなるに。

いたむこと多し綈光の促なるを。

露はまどかなり池上の紫に。

風はひるがえす庭裏の緑を。

機を下れば西眺驚せ。

砧を鳴らせばにわか東旭なり。

芳汗蘭湯に似たり。

雕金辟龍を辟く。

散は度す廣陵の音。

慘は寫す漁陽の曲。

別鶴悲しみ已まず。

離鷺断えて更に續ぐ。

尺素魚腸にあり。

寸心雁足に憑る。

《玉台新詠》三八七頁

内容を示すと、「別れ際に金管を奏してくれたが、あのあわたたしい響きは傷ましいものであった。その時赤い帳を照らす月光も束の間であった。その後池上の紫萍には円かな露が宿り、庭の緑草には風がひるがえるようになった。機からおり立つと、西方に晦月がはせとぶように見え、砧を鳴らせば、にわか朝日が東天にかがやく。その光を受け、かんばしい汗が流れて蘭湯にゆあみしたような心地となる。女は金を散りばめた龍燈の光を避ける。やがて「廣陵散」の琴曲を奏で、「漁陽摻搗」という鼓の打ち方をまねる。「別鶴」の曲を奏すれば、とめどなく悲しみが起こり、「離

鷺」の曲を奏でると、別れの悲しさのために調べは途絶えがちである。

この思いを、どうしてあなたに伝えようか。かつて一尺の白絹にしたためた手紙を魚の腹中に入れて贈ったとか、またおとずれを雁の足に結んで思う人に伝えたとかいう故事を真似るよりほかはあるまい。」となろう。

この詩における「別鶴」と「離鷺」は共に琴の名曲である。別離の意をあらわす曲である。また、「尺素在魚腸」は鯉魚の腹中に手紙を入れて人に贈ることを指す。中国の漢詩では「鯉魚」は信書のことを指す。魚は深く潜んでいるため秘密を要する信書のことをいうのである。

「寸心雁足」は蘇武の故事を指す。『漢書・蘇武伝』は、蘇武と雁について次のように記載した。

武、字子卿。少以父任、兄弟并为郎。稍迁至栢中厩监。时汉连伐胡、数通使相窥观。匈奴留汉使郭吉、路充国等、前后十余辈。匈奴使来、汉亦留之以相当。天汉元年、且鞮侯单于初立、恐汉袭之、乃曰「汉天子我丈人行也。」尽归汉使路充国等。武帝嘉其义、乃遣武以中郎将使持节送匈奴使留在汉者、因厚赂单于、答其善意。武与副中郎将张胜及假吏常惠等募士斥候百余人俱。既至匈奴、置币遗单于。单于益骄、非汉所望也。

(中略)

昭帝即位数年、匈奴与汉和亲。汉求武等、匈奴诡言武死。后汉使复至匈奴、常惠请其守者与俱、得夜见汉使。具自陈过。教使者谓单于、言天子射上林中、得雁、足有系帛书、言武等

在荒澤中。使者大喜、如惠語以让单于。单于视左右而惊、谢汉使曰“武等实在。”

【現代語訳】

蘇武、字子卿。若い頃、父親の職務関係で任用された。兄弟みな皇帝の侍従官になった。蘇武はだんだん漢宮移園の厩を管理する官に昇った。当時、漢の朝廷は匈奴を絶えなく討つていて、何度もお互いに使節を送って観察した。匈奴は漢の使節郭吉、路充国など前後約十人余りを取り押さえた。匈奴の使節が漢に来たら、漢の朝廷も同じく人数の使節を取り押さえた。天漢元年、且つ鞬は单于になったばかり、漢の襲いを恐れるため、このように言った。「漢の皇帝は、私の先輩である。」そして、漢朝廷の路充国などの使節を全部返した。漢武帝は彼のこの道徳的なやり方を讃美し、蘇武を中郎将として匈奴へ派遣した。蘇武は漢朝廷に取り押さえられた匈奴の使節らを匈奴まで送るちなみに、单于の好意を答えるために、单于に豊かな礼も贈った。蘇武と副中郎将張勝及び臨時委任された使臣属官常惠など、募集してきた兵士を加え、偵察人百人あまり、共に匈奴を向かって出発した。匈奴に着くと、お金と物などを用意して单于に贈ったが、单于はますます傲慢になり、漢朝廷の望みと違った。その後、蘇武は長い間匈奴に取り押さえられ、牧羊人になった。

漢昭帝が即位。数年後、匈奴と漢は協議をするに達した。漢朝廷は蘇武たちを探し求めるが、匈奴の方は蘇武がすでに死んだと嘘をついた。その後、使者はまた匈奴に來た。常惠は

監視人をお願いをして一緒に使者を見に行つた。使者にこの数年間に匈奴にいる状況をすべて告白した。使者が单于にこのようなことを言いなさいと教えた。それで、使者は单于に「天子は上林苑で狩りを行つて、一匹の雁を射し得た。雁の足で帛書を繋がる。蘇武たちが北海にいと書いた。」使者は大喜びで、常惠の言うどおりに单于を責めた。单于は周りの人を見て驚い、漢の使者に「蘇武たちは確かに生きている」と謝つた。それで、蘇武たちは漢に戻つた。

以上のような「蘇武の故事」によつて、雁書、信書、雁使などの詩語が誕生するようになったのである。「余²⁰¹」。つまり、雁は使者のイメージを持つ。中国の漢詩では人の思いを伝える場合、「鯉魚」という言葉を使うことが多いが、ここまで論者が整理してきた日本の勅撰漢詩文における「閨怨詩」には、「鯉魚」を使うことがあまりない。しかし、「雁」により信書を送ることは日本の漢詩によく見られる。日本の漢詩人たちは「雁」を特に好んだと考えられる。

余²⁰¹は『東アジア古典漢詩の比較文学的研究』の第三編「東アジア古代漢詩に見る「雁」の象徴性」で、中国古代漢詩における「雁」の詠まれかたは四つあると論じた。それは、雁と恋情、雁と望郷の念、雁の使及び雁と季節の推移の四種類である。

同じ章節では、日本古代漢詩に見る「雁」のイメージは雁と秋の到来、離別の情、友情を詠むことを述べている。「雁は平安時代の詩歌において、渡り鳥としての習性により、秋に飛来して春とともに故郷の北国に帰って行くところから、「来る雁」と「帰る雁」とに峻別されて、それぞれ秋と春の代表的な景物となっている。」

と余氏が述べた。しかし、余氏の日本古代漢詩の「雁」について論ずる例は主に『懷風藻』から取り上げたが、後の時代の勅撰漢詩文三集に、特に閨怨詩の中の「雁」はどのイメージだろうか。

『文華秀麗集』の桑原腹赤の「奉和聽擣衣。一首」を見ると

閨妾當驚邊已霜。

何處擣衣宵達旦。

寒樓月下萬家場。

暗中不辨杵低舉。

枕上唯聞聲抑揚。

守夜宮鐘乍相和。

應通長信復昭陽。

とあって、韻は翔、霜、場、揚、陽である。初句では、二羽ずつの秋の雁が数羽かけてゆく」と表現して、秋の季節を示した。しかし、(11)で「雙雙」が「雁」と繋がるのは特別な例である。(佐野 2006)は、『詩経』の雁は、飛ぶ様子、鳴き声などの生態が詠まれながら、男女間の秩序を守るもの、特に婦徳に関わる譬喩としての儒教的解釈が加えられている。」という。この「雙雙秋雁数般翔」で、「般」は「番」に同じく『日本古典文学大系』注、夫婦で飛

雙雙秋鴈數般翔ける。
 閨妾當に驚くべし辺已に霜るか。
 何れの処にか衣を擣ちて宵より旦に
 至る。

雙雙秋鴈數般翔ける

閨妾當に驚くべし辺已に霜るか。

何れの処にか衣を擣ちて宵より旦に

至る。

空楼の月下万家の場。

暗中辨かず杵の底拳を。

枕上唯聞くは声の抑揚のみ。

夜を守る宮鐘乍ちに相和ひ、

應に通ふべし長信復昭陽に。

ぶ雁を表す。周知の通り、本来、二羽ずつ飛ぶのは燕、鶯、鴛鴦である。「雁」はたいていの場合、単独的に使われる。例えば、菅原清公の「五言 奉和關山月・太上天皇在祚・一首」のように、

關山秋宿月。

夜冷月彌清。

影共征輪滿。

光含旅鏡明。

龍城照雲陣。

雁塞掛星營。

還入高樓裡。

空令思婦情。

關山秋宿の月。

夜冷かに月彌清し。

影征輪と共に満ち。

光旂鏡を含みて明かなり。

龍城雲陣を照らん。

雁塞星營を掛く。

還つて高樓の裡に入り、

空しく婦情を思は令む

（『経国集』二六四頁）

「雁」十■のパターンの如く、雁は遠い所と繋がる。後の句は月を見ることで、夫がいる「雁塞」を思い出すため、閨婦人の思いを引き出せるのである。ペアの燕、鶯、鴛鴦を見ると、男女が一緒にいる時の幸せを想起するが、「雁」を見ると、普通、夫が行った遠い所を想起する。しかし、『文華秀麗集』の桑原腹赤の「奉和聽擣衣。一首」は「雙雙」と「秋鴈」を合わせて、夫が傍にいない時の幸せと、今遠い所にいる夫に対しての思いを融合した。この表現により閨怨詩の景物の要素が日本で受容されていたことがわかるのである。

要するに、勅撰漢詩文三集と『玉台新詠』における「閨怨詩」などの共通表現には鶯、鴈、鶯、鳳、鶴、鴛、蟬、燕、コオロギなどがある。中国の「閨怨詩」にとって、それらは不可欠な存在

であるが、それは日本にも受け継がれている。

八、支度品、化粧（特に眉毛を強調する）

『玉台新詠』に入集する六朝前期の詩人の社会地位はあまり高くないので、社会低層生活をよく了解し、コオロギや鴛鴦などのような悲しい景物に注目した詩作を残している。しかし、晋以降の詩文にはそれらの動物が漸く消え、鴻雁・白鴿・蜂蝶など、より審美的な景物が書かれるようになる。

景物に加え、詩人の心境と地位の変化が反映されるのは、やはり日常生活品である。例えば、燈、蠟燭、鏡などに変化が窺える。

『玉台新詠』上巻、謝朓「雜詩」の詠物詩「燈」、「燭」、「鏡臺」では、物を借りて夫に対する恋しい怨みを表した。「閨怨詩」に描かれる鏡は常に埃だらけで、閨の憂いを抱えた婦人に化粧する気持ちが起こらない様子を表す。例えば、徐幹の「情詩一首」を見ると、

「情詩一首」 徐幹

高殿郁崇崇，
廣厦凄冷冷。
微風起閨閣，
落日照階庭。
峙蹕雲屋下，
嘯歌倚華楹。
君行殊不返，
我飾為誰榮。

壇薰口不用，
鏡匣上塵生。
綺羅失常色，
金翠暗无精。
嘉肴既忘御，
旨酒亦常停。
顧瞻空寂寂，
惟聞燕雀聲。
憂思連相属，
中心如宿醒。

（『玉台新詠』一〇一頁）

下線部の「鏡匣上塵生」は夫が久しく帰らず、たとえ着飾っても見せる人がいないため、身の回りの支度品の掃除も怠っている様を示す。また、鏡にはもうひとつ作用がある。それは鏡を見ると、自分自身の容貌の変化に気づいてしまうのである。容貌の変化に時間の過ぎたことを感じ、夫と会えない悲しみも一層深くなる。

日本の「閨怨詩」では、5番小野岑守「雜言。奉和聖製春女怨」に「強對鏡臺試拂塵」という表現があって、久しく掃除しなかった鏡の埃をはらうことが閨の怨婦にとって辛いことであると解釈できる。52番惟氏「雜言。奉和搗衣引。太上天皇在祚。一首」にも「匣中掩鏡休容飾」、即ち、鏡を匣の中に隠して容貌を飾ることをやめるという表現がある。そして、『文華秀麗集』巨勢識人の「和伴姫秋夜閨情。一首」には「唯知曉鏡玉殘」とあって、鏡を通して容貌の衰えに対する悲しみを表した。前述のように「閨怨詩」

の自然描写の要素として「月」が含まれていた。つまり、「鏡」は日本、中国双方の「閨怨詩」において不可欠な要素だと言えよう。

次は美人の仕草を表す要素について考察したい。まとめた五十七首の女性と関わる詩をみると、「眉」をめぐる表現が多い。例えば、「春日代妓（古詩體）」藤原道雄の「畫眉」、「奉和婕妤怨。一首」巨勢識人の「愁黛」、「雜言。奉和聖製春女怨」小野岑守の「蛾眉」、「奉和春閨怨。一首」菅清公の「舒眉」、「奉和春閨怨。一首」巨勢識人の「蛾眉」、「重陽節神泉苑。賦秋可哀。應制」良安世の「寒眉」である。なぜ美女を「眉」で示すのだろうか。「春日代妓」と『玉台新詠』「詠美人治粧」から、眉と美貌の繋がりを見てみたい。

まず、『玉台新詠』の江洪「詠美人治粧」を見よう。

「詠美人治粧」 江洪

上車畏不研。車に上るとき研ならざらんことを畏る。

顧眄更斜轉。顧眄して更に斜轉す。

大恨畫眉長。大だ恨む畫眉の長きを。

猶言顏色淺。猶ほ言わん顔色浅しと。

（『玉台新詠』 六六六頁）

この詩は美人が化粧する姿を描く。出がけに車に乗るときは、自分が醜くなろうかと氣遣われる。そのため鏡に向かって振り返ったりみまわしたりし、更に腰をひねったりして眺める。時に眉の描き方が長すぎたかと恨めしく思われたり、そうかと思うと、また顔が狭く見えると言われはせぬかと氣遣ったりする。眉を長く描けば顔が広く見え、短く描けば顔が狭く見えよう。当時の化

粧法は、眉は長く描き顔面は広く見せるのが、美しいとされたようである。ちなみに、「蛾眉」が唐の宮廷に流行り、美人の証とされた。

次は前に挙げた『凌雲集』「春日代妓」をみたい。「通夜粧樓獨畫眉」という表現は一晩化粧用の楼で一人眉を描くことを表す。この誌の主人公は妓であるが、化粧用の特別な楼があることから、高い地位にあると考えられる。それに、独りで、「詠美人治粧」の眉を描くのは、大事な人に会いに行くためであり、自分の顔に対する不安などを表している。つまり、「眉」の表現を通して、女性の美しさと女性が自分の容貌に対して抱く気持ちが表示されているのである。

以上をまとめると、日本の「閨怨詩」は、中国の「閨怨詩」の構造要素を引用している。これらの特徴を踏まえて、勅撰漢詩文三集における閨怨詩の場面と人物像を詳しく把握していきたい。

参考文献

- ・論者『学芸古典文学』第四号（二〇一一年三月）
- ・余淳宗『東アジア古典漢詩の比較文学的研究』（二〇一一年三月）
- ・井実充史『文華秀麗集』『秋月歌』論——閨怨詩の日本の変容——『言文』第五十一号（二〇〇四年三月）
- ・中野方子「廢屋と琴——『古今集』にみられる閨怨詩類型とその継承に関するノート——」『立正大学国語国文』第42号（二〇〇四年三月）
- ・『懷風藻等五詩集』（古典文学全集刊行会板一九二六年四月）

- ・『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹 日本古典文学大系』（岩波書店 一九六四年六月）『文華秀麗集』の引用はこれにより、一部私に改めた。また、『凌雲集』は『校註日本文学大系』により、私に書き下しを附した。
- ・『日本文学大系』第24卷（国民図書株式会社一九三〇年十一月）
- ・『懷風藻等五詩集』（古典文学全集刊行会板一九二六年四月）
- ・『新編日本古典文学全集 源氏物語②』（小学館）
- ・『新釈漢文大系 淮南子』（明治書院 昭和五十七年七月）
- ・『中国古典文学大系漢書・後漢書・三国史列伝選』第13卷（平凡社 昭和四十三年六月）
- ・『新釈漢文大系 玉台新詠』（明治書院 昭和四十九年二月）
- ・『史記の事典』（青木五郎、中村嘉弘編著 東京大修館書店 平成十四年七月）

（コ・シメイ／一橋大学大学院修士課程）